

二国間交流事業 共同研究報告書

令和6年4月30日

独立行政法人日本学術振興会理事長 殿

[日本側代表者所属機関・部局]
立命館大学 総合科学技術研究機構
[職・氏名]
教授 中川 毅
[課題番号]
JPJSBP 120229941

1. 事業名 相手国: イラン (振興会対応機関: OP) との共同研究

2. 研究課題名

(和文) 農耕を成立させた気候の安定性: 「肥沃な三日月地帯」にもっとも近い地質学的記録

(英文) Climatic stability that made agriculture possible: A geological evidence closest to the Fertile Crescent

3. 共同研究実施期間 2022年4月1日 ~ 2024年3月31日 (2年0ヶ月)【延長前】 年 月 日 ~ 年 月 日 (年 ヶ月)

4. 相手国側代表者(所属機関名・職名・氏名【全て英文】)

Iranian National Institute for Oceanography and Atmospheric Science
Member of scientific board・Naderi Beni Abdolmajid

5. 委託費総額(返還額を除く)

本事業により執行した委託費総額		3,900,000 円
内訳	1年度目執行経費	1,900,000 円
	2年度目執行経費	2,000,000 円
	3年度目執行経費	- 円

6. 共同研究実施期間を通じた参加者数(代表者を含む)

日本側参加者等	4名
相手国側参加者等	6名

* 参加者リスト(様式 B1(1))に表示される合計数を転記してください(途中で不参加となった方も含め、全ての期間で参加した通算の参加者数となります)。

7. 派遣・受入実績

	派遣		受入
	相手国	第三国	
1年度目	2	0	()
2年度目	1	0	()
3年度目	-	-	()

* 派遣・受入実績(様式 B1(3))に表示される合計数を転記してください。

派遣:委託費を使用した日本側参加者等の相手国及び相手国以外への渡航実績(延べ人数)。

受入:相手国側参加者等の来日実績(延べ人数)。カッコ内は委託費で滞在費等を負担した内数。

8. 研究交流の概要・成果等

(1)研究交流概要(全期間を通じた研究交流の目的・実施状況)

2023年の3月におよそ1週間、9～10月におよそ4週間、現地に滞在して研究活動をおこなった。その間、主として Abcolmajid Naderi Beni 博士および Kamal Taheri 博士と行動を共にし、研究の意見交換や技術の委譲をおこなった。とくに Nderi Beni 博士とは良好な関係の構築に成功し、定期的に進捗を報告しあったり、新たな国際交流プロジェクトに共同で応募するなど、研究の発展につながっている。

(2)学術的価値(本研究交流により得られた新たな知見や概念の展開等、学術的成果)

後述するように、現時点ではまだ試料の採取に成功しただけであり、新たな「知見や概念」を創出するところまでは到達できなかった。だが上記の交流を通して、「暴れる気候」と「農耕の起源」に密接な関係があるらしいという認識を、相手国側の研究者と共有することには成功した。

(3)相手国との交流(両国の研究者が協力して学術交流することによって得られた成果)

掘削に際しては十分な日程を確保し、採取する試料の量に余裕を持たせることを心がけた。そのため、試料1セットは日本に持って帰ったが、ほぼ同等のもう1セットは、現地の研究者が分析できるように、イランにそのまま残しておくことができた。

(4)社会的貢献(社会の基盤となる文化の継承と発展、社会生活の質の改善、現代的諸問題の克服と解決に資する等の社会的貢献はどのようにあったか)

採取に成功した試料は、過去の少なくとも1万7000年を連続的にカバーしており、農耕の起源を議論するには十分な長さを持っている。上述のように、今回は試料採取に成功しただけであり、その分析は今後の課題として残される形になったが、それが今後の後継プロジェクトによって成功した暁には、「暴れる気候」と人類の未来に関する重要な示唆が得られると確信している。

(5)若手研究者養成への貢献(若手研究者養成への取組、成果)

日本側参加者の北場と、イラン側参加者の Taheri 博士はともに若手に該当する。この二人に、遠隔地における湖沼掘削のノウハウを伝達することができた。また、得られた試料の精密な深度管理を実現するための専用ソフト、LevelFinder の使用法をイラン側に定着させた。このシステムは今後、共同研究者の Djamali 博士が拠点としているエクスマルセイユ大学(仏)など教育の場でも使われると予想され、育成の面での波及効果が大きい。

(6)将来発展可能性(本事業を実施したことにより、今後どのような発展の可能性が認められるか)

ちょうど本プロジェクトが終了した直後から、日本側代表の中川を領域代表とした学術変革領域研究(A)プロジェクト、『『暴れる気候』と人類の過去・現在・未来』がスタートした。「暴れる気候」と文明という視点を、イラン・メソポタミアだけでなく日本やマヤ地方にも拡大し、気候と人類のかかわりに関する私たちの認識を、根底から変革することをめざす。

(7)その他(上記(2)～(6)以外に得られた成果があれば記載してください)

特になし